

# 生研 ニュース

PHOTO 岡宮誠一

1991.3.12  
No.8

## IIS TODAY

大学院学生  
白雪梅

白雪梅（バイ・シュエメイ）さんは中国からの留学生で、第5部村井研究室の博士課程1年に在籍中。北京大学理学部で構造地質学を学ぶうちリモートセンシングに興味を引かれて、2年半ほど前に本学土木工学専攻の修士課程に入学した。修士論文も村井研究室でまとめ、衛星NOAAから得られる地理データと植生指標にもとづいて、居住可能地域の判別をおこなった。

現在も、衛星データや気象データから抽出した農業生産性などの地球環境情報をもとに、居住可能性を判定する研究に専念している。一口に居住可能性といってもま

だ漠然とした概念でしかないので、これをどうやって工学的にきちんと定義するかが、さしあたりの課題だという。広大な母国・中国の全土にわたって居住可能性を判定してみたい——大きな夢に向けた研究生活が、いま楽しくてならない。

楽しい理由がもうひとつ。留学先になぜ東大を選んだかと聞くと、「カレが生研にいたから」との答がすぐ返ってきた。第1部田村研の鄭京哲さんとはもう5年来の恋人どうし。愛称“白雪姫”さんも今年10月にはめでたくゴールインです。独身諸君、残念でした！（K）

## ■ 阪大産研との研究交流シンポジウム開かれる

大阪大学産業科学研究所の推進研究「知的材料設計と新素材の創出」の研究グループと本所の共同研究グループ「ヘテロ界面の構造

と機能の解析評価」による研究交流シンポジウムが、平成2年11月26日午後、本所の第3部輪講室で開かれました。産研からは、権田

俊一教授(研究推進委幹事)、中島尚男教授、長谷川繁彦氏が来所されました。生駒俊明教授と権田俊一教授による両研究グループの概要の紹介を皮切りに、6件の研究課題について講演があり、密度の高い情報交換が夕刻まで続きました。講演内容や方法に関する突っ込んだ質疑と、共同研究のベース等に関する全般的な話題交換が入り交じり、大学付置研間の研究交流シンポジウムという趣旨にふさわしい会合でした。研究体制の多様性に関する認識を深めたことと、研究成果を研究担当者の風貌つきで理解できたことが、とりわけ印象に残りました。(岡野達雄 記)



2

## ■ 第4回生研イブニングセミナー

「都市シリーズ」の4回目。今年のテーマは「都市のしくみ—居住の環境と基盤—」でした。今回の特徴は、建設系以外の講師として坂内正夫教授(コンピュータマッピング)と藤田隆史教授(揺れない建物を創る)に加わっていたことです。本来都市に関わるテーマなら所内の多くの教官が参加できるはずですから、今回はその第一歩としてまことに有意義でした。

内容もおおむね好評で、参加者は平均150名を越していました。特に駒場からの参加者が年々増加し、ついに97名までになったことです。どうやら教養学部の学生の

中で本イブニングセミナーの評価も固まってきたようです。

今後もこのセミナーはぜひ続けたほうがよい、との励ましはよく

いただくのですが、会場の設営と片付けはなかなかたいへんで、なにか工夫できないかと思案しています。(龍岡文夫 記)



## 技術官・同補の研修説明会と 第1回技術部懇談会



左記説明会が平成3年2月5日午後4時より第1会議室で、約70名の技術官等が参加して行われた。岡田技術部長より今回の技術職員研修について、経緯と年度内に予定されている研修について説明があり、OJT、FJTなどに関する質疑応答が行われた。説明会に引き続き5時30分より第2会議室で懇親会が開かれた。岡田所長の挨拶に続いて岡宮誠一技術官が生研の技術部の抱負を述べ、鳥尾事務部長の乾杯で始まった。技術部発足以来初めての懇親会は終始和やかに7時過ぎまで続いた。

(職員担当 木下 健 記)

### Do You Know Us?

### 研究推進室

3

「ほう、研究推進室ですか？珍しいですね！」これは、2月12日、13日の両日、科学技術に関する行政監察のために来所された総務庁監察官の、私に対する第一声でした。国公立の研究機関の中でこのような組織を持っているところはほとんどないそうです。

本研究所では、昭和58年9月に「研究推進室」を設置いたしました。

た。その役割は所内の研究推進に関し所長の諮問に応え、研究グループの育成、国際化への対応、広報活動などについて企画・立案を行うこととされています。以来、中川、原島、高梨、中桐各教授が歴代の室長をつとめ着実に実績を上げてこられました。

現在のメンバーは写真のとおり6名ですが、最近1年あまりの活

動をまとめると次のようになります。①概要要求書の作成支援、②生研ニュースならびに論説特集の企画・発行、③寄附研究部門の運営要項の作成、④外部研究機関、企業などとの共同研究推進のための生研の研究データベース(RRS)の作成とIIS協同研究プログラムの広報、⑤所内研究グループ活動の支援・育成体制の検討、⑥大学院教育体制の拡充方策の企画立案。

要するに、本所における研究推進に必要な諸条件(予算、研究員、研究体制)の改善と拡充を行うための具体策を立案し実行するわけです。苦勞のかいあって、昨年暮れのご用納めの日「国際災害軽減工学研究センターが実現する見通し！」との明るいニュースが飛び込んできました。

(研究推進室長 二瓶好正 記)



(後)左より石塚・魚本・渡辺・黒田・西尾室員  
(前)二瓶室長

## ■全世界に向けて On Air!

本所博士研究員M. G. Melkumian氏（第1部岡田研究室）は、Radio Japanのインタビューを受け、1月19日のWeekly News Showで、同氏の来日経緯、研究内容などが全世界に向けて紹介されました。同氏は、1988年に本国アルメニアで発生した大地震による建物の被害原因を究明すべく、1

年間の予定で滞在していますが、「諸外国に向かって今後日本がすべきことは？」との質問に対し、国際的な研究交流、技術協力をあげ、またこれを進める上で今回生研の果たした役割の重要性を指摘し、本所の国際的なアクティビティの高まりをうかがわせました。(N)



# VISITS

4

### ●生研訪問者

1月20日（金）

韓国 生産技術研究院  
院長 朴 宇熙 (Woo-Hee Park) ほか1名

### ●客員研究員 (1991.3.1現在)

氏名	国籍・現職	部
Tadeusz Spichaj	ポーランド スチェシン工科大学化学技術 研究所 助教授	4
呉 煥燮	韓国 慶熙大学校 副教授	1

### ●外国人研究者講演会

1990年12月21日（金）

Dr. Jan Awrejcewicz  
Associate Professor,  
Institute of Mechanics, Technical University of Lodz, Poland  
"Future of Chaos in Mechanics"

写真でみる  
生研今昔物語  
(その3)

外苑西通り  
から見た  
生研

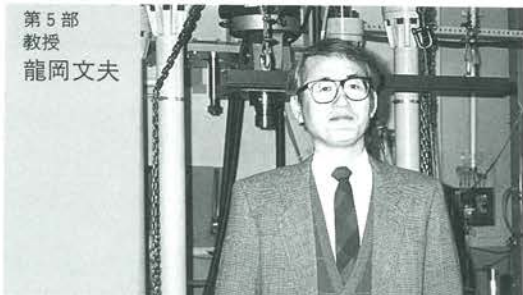


現在はタクシーの休息所(?)でもある車しげき外苑西通りも、昭和18年当時は都電のみ走る閑静な通りだったようです。(T)

# PERSONNEL

## ●昇任のご挨拶

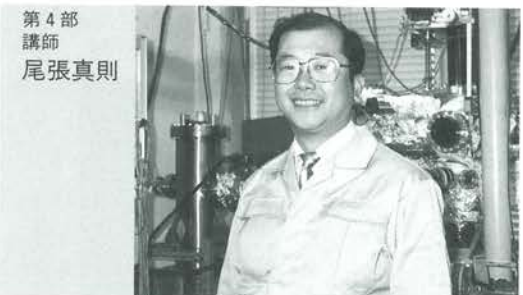
第5部  
教授  
龍岡 文夫



専門は基礎地盤工学です。構造物はすべて地盤上・地盤内に建設されるので、この分野は極めて古く今後も重要でしょう。最近、本四連絡橋・東京湾横断道路など巨大な構造物が多く、設計・建設にも20-40年という長期間を要します。生研での過去約13年など短く感じます。

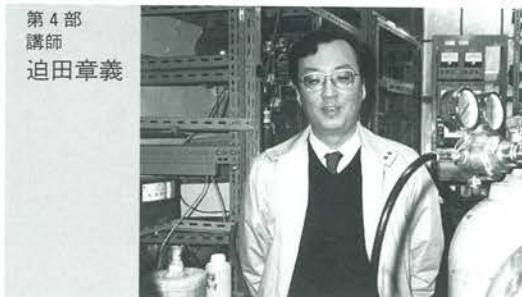
生研の前は、建設省土木研究所にいました。大学は現場的緊張感・直接研究費・組織が相対的に弱体ですが、そのかわり長期にわたって安定した立場・中立・自由という財産があります。しかし、それに安住することなく、最後には現場に役立つ研究を目指したいものです。生研ならこれができる、と確信しています。

第4部  
講師  
尾張 真則



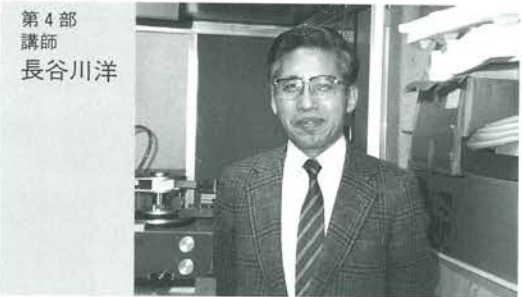
1990年12月16日付で第4部講師に昇任いたしました。現在、固体の表面・表層・界面の分析ならびにミクロンからサブミクロンにわたる微小領域の分析に関する研究を、光電子分光法、光電子回折法、電子やイオンのマイクロビームを利用した種々の顕微分析法などを用いて進めています。これらの分析手法は材料を用いて多様な機能を実現するためのデバイス開発に必要な不可欠であるのみならず、人間をとりまく環境の評価、さらには生体内での種々の現象の解析など多方面に活用できると確信しています。今後さらにこうした研究を推進するとともに、当研究所の発展にも寄与できる仕事に取り組んでいきたいと考えております。

第4部  
講師  
迫田 章義



平成2年12月16日付で第4部環境化学部門の講師に昇任させていただきました。大学院の5年間を生研でお世話になった後、他大学で助手やポストドックを勤めて再び生研に戻り、ようやく2度目の生研にも慣れて、はりきっているところです。現在は、従来からのテーマである吸着分離操作の基礎と応用、そして新しいテーマである広域環境のモデル化などを軸にして研究を進めております。生研の恵まれた研究環境を十分生かして、ユニークな研究を行うよう頑張りたいと思っています。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

第4部  
講師  
長谷川 洋



1月1日付で第4部無機工業化学部門の講師に昇任いたしました。生研に助手として着任以来、聴力障害というハンディを持っていたにもかかわらず、伸び伸びと研究ができましたのも、ご指導くださった今岡名誉教授、安井教授をはじめ皆様からいろいろお力添えをいただいたお蔭と感謝しています。最初はガラスの強度の研究をしておりましたが、他部の先生にアドバイスをを受けたり、装置の製作では試作工場の方にもお世話になったりで総合研究所としての生研のメリットを享受しました。次にガラスの構造解析を始め、現在に至っておりますが、なかなか底の深いテーマで、まだ工夫すべきところがたくさん残っています。未熟者ですが、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

第4部  
助教授  
岩元和敏



内反応とは異なる反応を組み合わせることで実験室内で再現したいと思っているのですが、まだまだ不明な点も多く、応用を考えるには至っていません。どのように発展していくかまだ分からない分野ですが、楽しみながら研究をしていきたいと思っています。

2月1日付で助教授に昇任いたしました。専門は有機材料化学で、膜材料開発、膜透過機構の解析を主に仕事としてきておりますが、もう一つの研究分野として、非線形化学反応システムが生みだす特異的現象に興味をもっています。例は生命体で、多くの活動が、反応システムにより生みだされています。このような活動を、生体

## 人事異動 (平成3年1月2日～平成3年3月1日)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)・現官職
3.2.1	岩元和敏	昇任	文部教官助教授 (第4部)	文部教官講師 (第4部)
//	大賀宏行	転任	文部教官助手 (第5部)	文部教官助手 (東京工科大学工学部 土木工学科交通工学講座)
//	増田範通	配置換	文部技官 (第2部)	文部技官 (医学部附属病院管理課)
3.2.16	鮑 偉光	採用	文部教官助手 (第2部)	
3.3.1	奥山光作	採用	文部技官(第4部)	

## 受賞

第2部	助教授 須田義大	JREA論文特別賞 (日本鉄道技術協力)	新方式の台車構造、駆動方式、駅構造による総2階電車	1991.2.21	
第4部	教務補佐員 小野幸子 元大学院学生 川口朋子 助手 市野瀬英喜	教授 石田洋一 教授 増子 昇	論文賞 (表面技術協会)	クロム酸水溶液中で生成されたアルミニウムアノード酸化皮膜の格子像観察	1991.2.22

## SNAPSHOTS



▲教室で見つけためずらしいランの花  
(アイスクラスカレード)



◀職員厚生費で設置された  
バスケットゴール

# INFORMATION

## ■ 停年退官教官記念講演会と記念パーティのお知らせ

平成3年  
3月18日(月)、19日(火)  
第一会議室

	3月18日(月)	3月19日(火)
● 13:20	開会、所長挨拶	● 13:20 所長挨拶
● 13:30	第1部 田村重四郎教授 ～15:00 「地中と土の構造物の耐震性について」	● 13:30 第3部 河村 達雄教授 ～15:00 「電力系統における絶縁信頼性向上の追求」
● 15:30	第1部 小倉 磐夫教授 ～17:00 「応用光学から量子光学まで—理論とその応用—」	● 15:30 第4部 妹尾 学教授 ～17:00 「物質・材料の非線形機能」
		● 18:00～ 記念パーティ

## ■ 発行物のお知らせ

● 生産技術研究所案内(1991—1992)英語版

● 生産技術研究所報告

Vol.35 No.7 「ボロン繊維およびその金属基複合材料に関する研究」

著者：本田紘一・篠原嘉一・大蔵明光

Vol.35 No.8 「炭素繊維強化炭素(C/C) 複合材料の新しい製造技術に関する研究」

著者：張 東植・中川隆夫・大蔵明光

Vol.36 No.1 On Nonlinear Vibration of a Beam  
—Response of a Beam with a  
Gap at One End —

著者：渡辺武・柴田碧

● 大型研究成果概要集

第6号 「先端素材開発工学に関する研究」

研究グループ：先端素材開発研究センター

(3月末発行予定)



◀ 中村亦夫名誉教授(第4部)ご夫妻。  
勲三等旭日中綬章受章祝賀会にて  
(2月8日、学生会館)



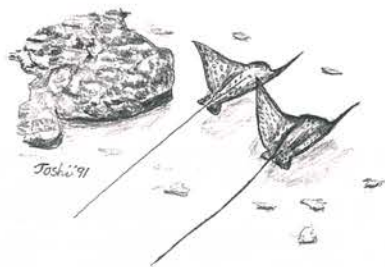
新しくなった玄関前の街灯▶

## アイスランドのエイのひれ

第3部 教授 生駒俊明

一面真っ白の氷で覆われた緩い起伏の山間、黒々と光る一筋の帯に向かって、アイスランド航空02便は次第に高度を下げてゆく。レイキャビク湾には、押し寄せる流氷の上に黒い点としか見えないペンギンの群れが、愛想よく歓迎してくれる。……というシナリオを描いてアイスランドの首都レイキャビクを訪れた。だが事実は小説より平凡であった。思いに反し、レイキャビクは雨だった。12月も半ばだというのに。

人口25万人、一人当りのGNPは89年で世界第2位。漁業を国家の業とし、他はほとんど輸入に頼っている。物価の高い町。魚がとれないとGNPは世界第8位になってしまう。また火山の島でもある。北米プレートとユーラシアプレートの割れ目が国の真中を通り、年間1cmの割合で東西に裂けていく島国。間欠泉の英語名ガイザーgeyserは、間欠泉で有名なアイスランドの地名Geysirからきている。



魚がおいしい。北海でとれた独特のロブスターは、かたちはシャコのような。メインロブスターとも伊勢エビとも異なりラングステイヌに似ているが、もっと太く甘く柔らかく誠に美味。12月23日の夕、アイスランド人は皆エイのヒレを食べるという。そこで、レイキャビクのレストランで特注して試食。驚いたことにエイのヒレは強烈なアンモニア臭と口中にひろがる強い刺激があり、唐ガラシほどに辛く感じる。その強烈な刺激に、途半ばでギブアップ。そこでふと疑問が湧いた。エイのヒレは、新鮮だとアンモニア臭が強くなるのか、古いからアンモニアを生じたのか。日本でもエイのヒレは時々食べるが、これほど強いアンモニアは含まれていない。料理法で除去しているのか。目下この疑問を解くべく研究中、答えを知っている方教えられたし。

## オーストラリア 観てある記

総務課  
二宮徹平



去る1月25日から31日までの7日間、おもしろい湾岸戦争のさなか無謀にも豪州へ旅立つこととなった。義父を連れ男二人という、いささか奇妙なペアの珍道中。じつはこの旅行、某スポーツ新聞のクイズに当選したもので、小生のこの快挙の蔭には、新聞を提供してくれた岡島君、ハガキを提供してくれた青木君の、涙ぐましい

後押しがあったのである。新聞の第一面で当選者氏名を見たときの二人の悔しがりようは、それはそれは尋常ではなかった。ともあれ、かわいい後輩たちに深謝申し上げつつ、南半球のパラダイスでの一週間を満喫したしたい。

ゴールドコーストには日本の資本がたくさん入って、物価はうなぎ上りのこと。どこへ行っても日本人、日本語の氾濫で、異国に来た感じがしない。まるで湘南にいる気分。が、スケールの大きい海岸線、荒々しい波、美しい砂は強く印象に残った。

シドニーではガイドブックを片手に夜のキングスクロスやチャイナタウンなど方々を歩き回った。自由行動が多く、勝手きままに街を散策できてじつに楽しい旅だった。二匹目のドジョウをねらって虎視眈々の日々。

### 編集後記

前号から本紙も2年生。その発行日の1月17日、まさかと思っていた湾岸戦争が始まってしまいました。戦車が走りミサイルが飛び、照準窓の向こうに爆煙が上がる……まるでSF映画の世界です(ケラ目前の2月28日、「湾岸戦争終結へ」の朗報)。ミサイル1発で1億円を越すというのも驚きでしたが、

90億ドル=科研費20年分という換算式には、いささか考え込んでしまいます。

表紙のIIS TODAY、研究室の(ひいては本所全体の)活動を根元で支えている大学院学生のひとり、白さんにご登場ねがいました。さわやかな笑顔が暗い話題を少しでも吹き飛ばしてくれるよう祈りつつ。(W)